

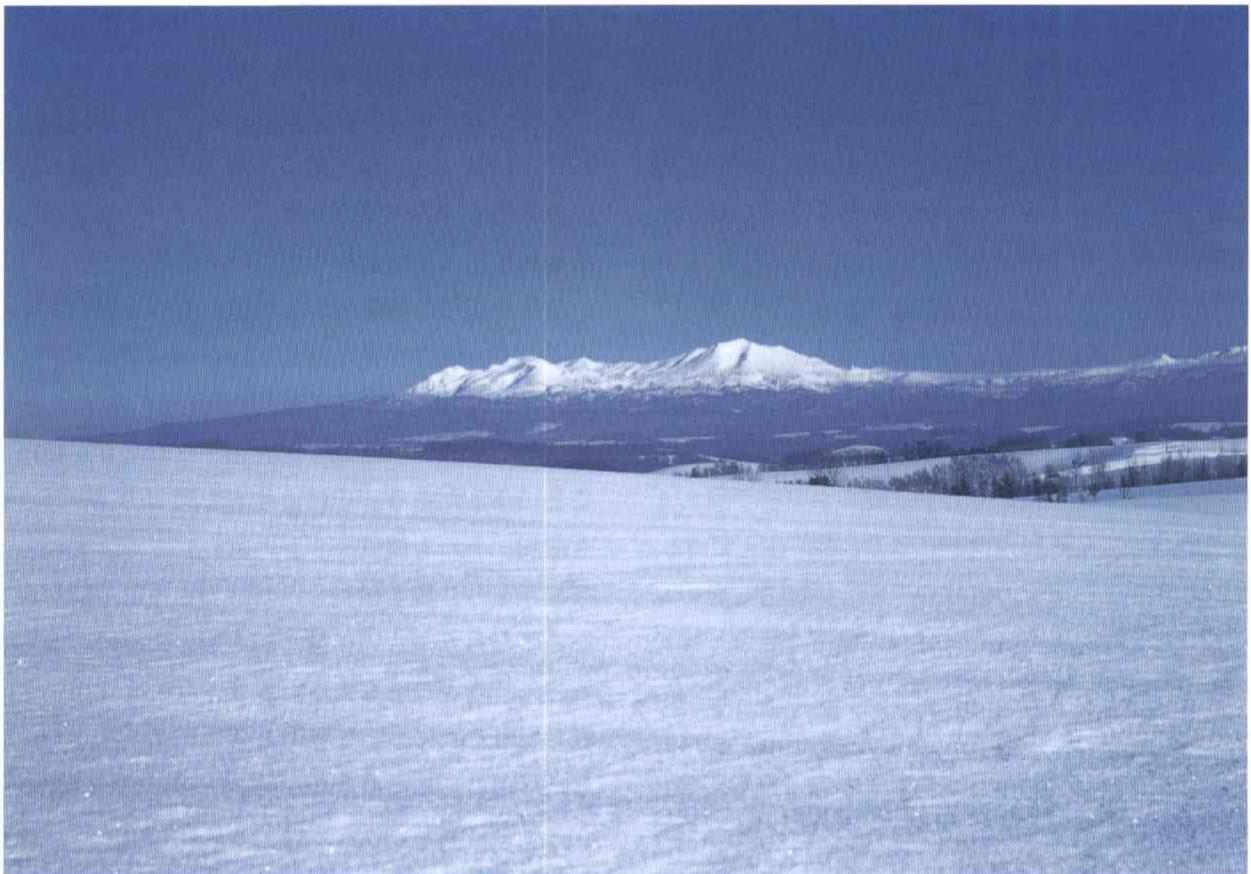


# 第 101 号

平成11年12月15日

編集 旭川医科大学  
厚生補導委員会  
発行 旭川医科大学教務部学生課

(題字は初代学長 山田守英氏)



(写真撮影 施設課 長島 章)

差別的な生物種名……………上口勇次郎… 2	研究室紹介 寄生虫学講座…………… 7
卒後10年目にして思うことー日々感謝ー ……………小笠 寿之… 3	解剖体慰霊式…………… 7
旭川医科大学に留学して……………金 殷鉄… 4	公開講座実施される…………… 7
解剖学実習を振り返って……………松岡 貴子… 5	セクシュアル・ハラスメントの防止について …………… 8・9
解剖学実習を終えて……………渡邊 浩司… 5	教官の異動……………10
クラブ今昔	学生の皆さんへ～学生課から～……………10
ワンダーフォーゲル部……………小高 淳… 6	窓 外……………高草木 薫…10
旅と鉄道研究会……………神保 絢子… 6	



## 差別的な生物種名

生物学 教授 上 口 勇次郎

伊豆諸島の鳥島に住む大型の海鳥アホウドリは、食用・羽毛採取のため大量に撲殺され、現在絶滅に瀕している。地上での動作が鈍く、殺戮が容易だったことから、捕獲者にこの名で呼ばれた。「海の王者をバカ呼ばわりとは、アホウドリの改名を提言、東邦大学・長谷川助教授」という記事が北海道新聞に載った(97年3月)。彼はこの鳥の保護と繁殖に長年取り組んで来た研究者で、その献身的努力により昨年末には鳥数が約1000羽まで回復した。彼がアホウドリの改名を提言する気持ちはよく分かる。

この記事よりだいぶ昔になるが、ママコノシリヌグイの改名を訴える投書記事を新聞で読んだ。この植物は原野や道端でごく普通に見られるタデ科の1年生草本で、茎には逆向きに多数の棘が生えている。種名の意味は“継子の尻拭い”で、逆向きに棘のある茎で継子のお尻を拭く(継母が継子を嫌って虐める時にお尻を引っ掻く)というところから出ている。投書を書いた女性は子連れ男性と結婚していた。ある時、この女性が小学生の息子と親子自然観察会に参加した。たまたま、息子にこの植物の種名を尋ねられたインストラクターは得意になって名前の由来を話し、脇で話を聞いていたこの女性はとても悲しい思いをしたという。「私と同じ立場にあって、実子と思って子供を慈しんでいる大勢の女性の気持ちをまさに“逆撫で”する、このような差別的種名の存在を絶対許せない」というのである。この女性の気持ちも大変よく分かる。

その気になって差別的と思われる名前をもつ動物種を調べてみると、これがずいぶん多い。前述のアホウドリ(阿呆)の他に、イザリウオ(いざり)、オニヤンマ(鬼)、コビトカバ(小人)、ザトウクジラ(座頭)、ジョロウグモ(女郎)、チビクワガタ(ちび)、トウゾクカモメ(盗賊)、ナマケモノ(怠

け者)、ハゲワシ(禿げ)、メクラウナギ(盲)など。各語で1種名しか挙げなかったが、コビト、メクラ、チビとつく動物数はそれぞれ2桁に上る。動物名だけでもそうであるから、植物名も加えたらまだまだあるだろう。メクラチビゴミムシは盲で、ちびで、ゴミという三重の差別用語をもつ気の毒な昆虫である。差別用語を撤廃すれば、“視覚障害性小型廃棄物ムシ”というすごい名前になる。

こんな訳で、偏見のある名前をもつ生物があまりにも多く、改名作業は簡単ではない。アホウドリの改名だけでお茶を濁そうとしたら、「俺達のことはどうしてくれる」と他の生物達からお叱りを受けることになるだろう。それよりもなによりも、「これも差別、あれも偏見・・・」と言い立てて、次々と言葉狩りをし、種名変更しただけで本当に差別がなくなるのだろうかという疑問がある。人々の心から差別の気持ちがなくならない限り、今の差別用語を撤廃してもそれに取って替わる新しい差別語が誕生するだけのことになりかねない。

「動物の命名は人々の歴史を反映している。我々の命名のあるものは、無知、虚飾、頑迷および個人的偏見に固執しすぎた結果であって、このことは、一般の言語が民族の習俗、自負、偏見の結果として生じたものであることに似ている。」この文章は、国際動物命名規約の序文の一部を要約したものである。新種を発見した研究者にはその生物の種名を付ける権利が与えられる。しかし、研究者が種名を付す時の大きな責任については、ついぞ大学の講義でお目にかからなかった。

まだまだ地球上には無名の生物がたくさんいる。新種と同定された時、その生物はいかなる種名を与えられ、現代のいかなる世相を背負って行くことになるのだろうか。



# 卒後10年目にして思うこと

— 日々、感謝 —

第11期生 小笠 寿之

まずは、私の10年目を振り返ってみます。学生時代から心臓に興味があり、試験対策も1内（循環器のみ）担当だったので、そのまま小野寺教授の第一内科に入局しました。同期は10人（赤坂、井手、上北、太田、木戸、中村、西垣、廣島、山口）でした。一度、小野寺教授に「オーペンは誰ですか!!」と怒られたことがありました。松橋先生（5期）には大変心労をかけてしまいました。前半は循環器、後半は呼吸器を回りました。一年間を通して忙しかったけど、充実感はありました。始め興味は循環器の心エコー検査でしたが、次第に呼吸器疾患（特に喘息）に移りました。私はCOLD（慢性閉塞性肺疾患）を“common cold；風邪”と思っているような学生でしたが、結局呼吸器を選ぶことにしました。2年目は名寄市立病院でした（くじで決まりました）。1期の赤石先生、6期の田中先生が私と同期の山口君を指導してくれました。横隔膜より頭側の疾患を担当しましたので（腹部は2内）、意識障害は一内でした。毎日どちらかが呼ばれ、脳出血や心筋梗塞は救急車に乗って旭川まで搬送しました。2内の谷君、東理君とともに名寄の夜は若い私達が守っているんだと言う自負もありました。3年目の10月に大学に戻りました。小野寺教授の退官と、菊地新教授の就任です。菊地教授が来られた時、「ああ、これが江戸城明け渡しなんだな。」と実感しましたが、あっという間に「明治維新」が始まり一内は変わりました。5年目は帯広厚生病院でした。ここでは北大一内の奥深さを知りました。ついでに結婚相手も見つけました。6年目からは大学の隣にある旭川リハビリテーション病院で3年間働かせてもらいました。3期の丸山先生、6期の近江先生のもと民間病院の厳しさとともに、楽しさも教えられました。毎週木曜日は退官された小野寺先生が病院回診に来られました。回診の他に、私の実験について聞いていただきました。5期中野先生、井手先生、生理の

岩元先生と肺循環（一酸化窒素；NO）の実験を行い、学位論文を発表させていただきました。アメリカでの学会発表は大変楽しかったです。9年目は呼吸器のメッカである道北病院で結核を含め呼吸器疾患全般を研修させてもらいました。そして、平成10年5月から道立釧路病院に勤務しています。10月からは一人となり、釧路地区の結核を私一人で見えています。毎日の外来と2つの病棟を持ち、副院長的な事務仕事などを行っています（身分は医長）。ハッキリ言って辛いです。今の私を支えているのは責任感と家族です。さて今回、この10年を総括するのに何か良い表現はないかと考えたところ、『感謝』という言葉がふさわしいのではないかと思います。この『感謝』という言葉は卒後10年にとどまらず、私の今までの人生においてもあてはまる言葉と思います。振り返ると、この世に生を受けてから、両親、兄弟、親戚や近所の人々に育てられた日々。医大卒業までいろいろな先生に教えられ、悪友達と一緒に学び、且つ遊んだ学生時代。卒業後、一人の医者として始めた新たな社会生活。バイトも含め色々な病院へ行き、多くの先生やスタッフ、そして、様々な患者さんとの出会い、多くの経験をさせていただきました。この日々の積み重ねが、今の私を形成しているのだと考えました。多分、今までの出会いや、経験はちょっとした偶然によって起きたものなのかも知れません。しかし、その集まりが今の私を作っているのですから、この「ちょっとした偶然」とは、実は、私にとっては『意味のある偶然』であったのだと思います（柳田邦夫の受け売りです）。だから、現在私はこの「偶然」に出会えたことに日々感謝しているのです。このような理由で『感謝』という言葉を選びました。

最後に仕事がどんな辛い時でも、いつも笑顔で私を元気にさせてくれる妻と、二人の子供にspecial thanks.



## 旭川医科大学に留学して

大学院 第4学年 金 殷 鉄

時は「光陰矢の如し」のように、私が旭川医科大学に留学に来てから、既に5年になろうとしています。現在は、日々憧れの博士課程学位発表の時期も近づき、最終コーナーをがんばって、走っている最中です。この5年の留学は、私にとって極めて貴重な経験であり、ある意味では私の学問人生の大事な転機点だと思います。ささやかですが、この場を借りて、私にこの留学チャンスを与えてくださった第一内科菊池教授、そして、平常に私の研究と生活を面倒してくれた長谷部先生と第一内科医局員一同に心から御礼を申し上げます。

さて、私は中国の東北地区の吉林省出身で、金 殷鉄 (Jin Yin-Tie) と申します。日本人は私を“キンさん” “キムさん” “チンさん” の様々な呼方をしました。実は“Jin” の発音が一番正しいですが、通常は呼びやすい通称“キン” を使っています。私が日本の言葉に興味を持ったのは、幼い時から、祖父の“いち、に、さん…” 日本語で数える習慣をいつも見て、日本語を聞いたことがあったことがきっかけです。そのうち、私はなにげなく日本の国に特別な憧れを持つことになりました。中学校3年生の時から、中国の外国語勉強政策が回復され、私は外国語科目として日本語を選択し、高校、大学時代も日本語の勉強に力を注ぎまして、いつか日本に留学したい気持ちでした。中国で医科大学と修士課程を終えた時、第一内科菊池教授の推薦で日本国文部省国費留学生の身分で旭川医科大学に留学することになりました。旭川に来る前に、映画とかテレビ、雑誌などで北海道の冬の風景を見た私は、北海道は大変寒い所と思って、冬用衣類をたくさん備えて来ましたが、旭川はそれほど寒い所ではありませんでした。実は中国で私が住んでいた所は北方の方で、冬は結構寒く、綿帽子をかぶる程度です。

私が日本に到着した日はちょうど阪神地区に大地震が起きた翌日でした。私は関西空港より日本に入国しましたが、大阪市に住む人々は、地震による恐怖感に溢れていたことが印象的でした。大阪で二日間滞在し、救急車のサイレン音の靡く中で、街を歩きながら、憧れの日本の街景を見物した。三日目に旭川行きの飛行機に乗り(乗客者全員10人程度、地震原因?)、旭川空港に到着しました。迎えにきていただいた第一内科の箭原先生、稲葉さん、澤田さんの案内で、車で雪の『トンネル』を走っていた私の気持ちは、同じ日本でも旭川は違うなという感じでした(95年1月は雪がすごかった)。しかし、菊池教授の主催で第一内科医局一同の熱烈な歓迎会で旅の疲れと不安感(地震)も柔らぎ、旭川での生活を本格的に始めることになりました。それから1年3カ月の臨床研修を終えて、大学院博士課程のコースに入り、長谷部先生の研究グループに配属され、忙しい日々を過ごしました。動物実験の経験が少ない私は、実験イヌの麻酔からset upまで一人ですることに非常に苦労しました。そこで、実験イヌの麻酔前において、無理なく親切にイヌと「交流」

と「付き合い」を十分したうえで、イヌの「納得」と「協力」を求める方法を工夫しました。最初から無理してふるまうと、イヌに「不親切」と判定されてしまい、自然の「付き合い」が出来ず、イヌ様にストレスを加えて、血中のカテコールアミンの上昇をもたらし、結局、実験のdataにも影響を与えることになります。今は、実験もやっと終わり、実験dataの整理中ですが、実験ノートに記録されている当時の一匹一匹のイヌの異なる反応、状況を再び見ると、かわいいイヌを自分の実験の犠牲にしたことが極めて残酷だったなという思いもあります。

研究の話はここまでにして、私は旭川で他にもたくさんいろいろな経験ができました。元来スポーツが下手だった私でしたが、雪が多い旭川で、毎年学生課が主催される冬のスキー教室に参加し、専門指導教師の指導でオリンピック選手並みに滑ることができるようになりました(誇大・恥ずかしい!!)。また、ドライブで北海道の温泉をたくさん廻り、中国では出来ない温泉の旅をたっぷり味わいました。また、子供も旭川市で生まれ、今は保育所に通うことになって、日本語も上手にしゃべれるようになり、これから中国に帰るとむしろ中国語を外国語として教えなければならない現状です。本当に、旭川市は私と家族にとって決して夢に忘れることのない特別な所であります。

次に、自分が5年近く日本に住んで感じたことを書きたいと思います。私は、旭川市国際交流課、医大の学生課或いは民間団体の主催でいろんな交流会にも参加したことがあります。このような会議やパーティの目的は主に外国人留学生と日本人との国際交流でした。しかし、多くの集まりは効果的でなく「事半功倍」になり、本当の心の交流は出来なかったと思います。これはお互いにまだなかなか崩されない偏見を持っているからこそです。もちろん、国はその国その国の歴史・文化・宗教・風俗習慣の上で築かれた国民性があり、人はそれぞれの性格、教育の程度、社会と家庭の背景や、人生の経験も違うと思います。しかし、これからの時代は各国の垣根がなく、相互依存関係が深まるグローバル化、国際化し、平和に共存する世界になるでしょう。特に、私たち外国人留学生は日本で勉強、生活する中で、誰よりも文化、習慣の違いを敏感に直感するので、まず日本の多様な価値観・倫理観・生き方なども自分なりに認識して、偏見無しに学び、この国の人たちの息遣いや心の伝わり方を素直に理解して、受け入れるべきだと思います。みなさんはどう思いますか?…

私はいつも日本の友人であり、将来日本で学んだいろいろな知識を、自分がどこにいても周りの人に日本の良い文化、習慣、精神を積極的に伝えたいと思っています。最後に、今までお世話になった第一内科教室一同の方々および旭川医大の皆様へ深く感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

## 解剖学実習を振り返って

医学科第3学年 松岡貴子

解剖体慰霊式が行われた日、にわかに式場となった体育館でご遺族が退出されるのを見送りながら、ここに集まった方々は皆、身内をなくしたのだと改めて思った。長い間お預かりし解剖させていただいた大切な御遺体をやっとお返しし、御挨拶できる日を迎え、何か一区切りつくように想像していたが、そうではなかった。私は、この方々と、献体を決意された御本人の思いにきちんと答えることができたのだろうかという疑問が立ち上がった。

振り返ると、解剖学実習は春休みが明けたばかりの、新学年の第一日目から始まった。講義室での短い説明の後実習室へ移動して、実習を始めるに当たっての準備をしたり注意を聞いたりした。それから実際の実習が始まった。解剖実習の始まりだった。

予習の段階で実際に必要な図や説明はなかなか見つけられず、実習の最中に勉強不足を痛感させられ

ることが多々あった。人体の構造を実際に見、多くを学ぶと同時に、その複雑で巧妙で繊細な世界に畏敬の念を感じた。そして、私にわからないことはまだ山積しているのだった。

御遺体からは与えられるばかりで、私には感謝を表すすべがなかった。医学教育の中で御自分の体を解剖することを私達学生に許して下さった方々がいたことを私は一生忘れることはないだろう。その御決意を受けとめ、これから、知識を身につけ、人の役に立つことができるように努めていこう。そして寄せられた善意へのご恩をお返ししていこうと思う。

いつか自分の受けた教育を振り返るとき、教官はもちろん、大学でお世話になったすべての人と、献体を決意された御本人と慰霊式でお迎えした御遺族を私はきっと感謝と共に思い出すだろう。

そしてまた、いつも忘れがちになるけれど、出会う人にはそれぞれ、その人を思い支えるそしてその人に支えられる家族や大切な人々がいる事を忘れないでいようと思う。

## 解剖学実習を終えて

医学科第3学年 渡邊浩司

解剖学実習は4月中旬から6月下旬まで、毎週4回、昼から夕方(時には夜)にかけて行われた。

3年生に進級して医師になる人誰もが体験してきたこの実習を目前とした時、とうとうこの時が来たという期待と、この実習に絶えられる精神力、体力が自分にはあるだろうかという不安を何か漠然とかかえていた。こうして迎えた実習初日に実際に御遺体を目前にして、やはり今までに体験したことのないような緊張と不安に襲われた。しかし、この御遺体は確にかつては生きていて、自らの意思で医学のために身を捧げてくださったのだと考え、大切に扱わなければならない、そして自分を悔いの残らないような実習にしなければならなかった。

それからの実習は確かに今までにないくらい大変

な実習だったが、毎日の実習が本当に発見と驚きの連続だった。教科書の記述通りの構造を発見して人体の構造の巧妙さに感動し、時に現れる教科書とは異なる構造を発見してその人の個性を実感したりと本当に教科書からは決して得られないものを御遺体は我々に教えてくださった。必ずこれらの知識、経験はこれからの医師としての人生の中で生きていくものと確信している。

9月の慰霊式には、御遺族の方々が多数いらしていた。我々がこのような貴重な体験をできたのは、医学のために献体をしてくださった方の意思、御遺族の方々の理解、実習の場を提供していただいた大学関係者の努力など、いろいろな人の支えがあって可能となったものだとこの慰霊式では実感させられた。これからも医師になるために多くのことを学んでいかなければならない。その中でも様々な人の支えがあることを忘れず、その意志を裏切ることのないよう立派な医師を目指して学んでいこうと思う。

# ク ラ ブ 今 昔

## ワンダーフォーゲル部

小 高 淳

皆さんは“ワンダーフォーゲル”の意味を知っていますか？“登山”というイメージがつきがちですが、ドイツ語で元々“渡り鳥”という意味だそうで、そこから、山野を歩き、自然に親しみ、懇親をはかる活動を意味するようになったそうです。我々ワンダーフォーゲル部もその意味に違わず、自然をこよなく愛するメンバーで構成されています。

我が部は一応体育会系の部活には属してはいるものの、他の部のような東医体なる目標とする大会は存在せず、もちろん練習も存在しません。行きたい時に行きたい場所に行き、目いっぱい楽しむというのが我が部のモットーであり、セールスポイントがあります。ただ、動もすると単なる旅行部になりがちかもしれません。

では、ワンダーフォーゲル部の実際の活動内容を今年行った函館遠征（5月上旬）を例にとってみて

みることにしましょう。

1日目は、旭川→富良野→日高→室蘭を経て、洞爺湖畔でキャンプ。この時期の富良野・日高地方の景色は最高!!、富良野では彼の有名な「北の国から」のロケ地を散策、そのワイルドさにはワンゲラーも脱帽。室蘭では地球岬を訪れ地球の丸さを実感。洞爺湖では有名な洞爺湖温泉に入るつもりが部長の手違いから入浴出来ず、部長のズサンな旅行計画が露見。2日目は一路函館へ。駒ヶ岳、大沼など絶景を楽しみながら到着、五稜郭公園の桜、函館の街の夜景を堪能しました。3日目は、松前経由してここでも桜を堪能、一路小樽へと向かいました。小樽では朝里川のほとりのコテージにて皆で鍋をつつき、旅の思い出などを語り合いました。

これは、ほんの一例にすぎません。雄大な自然を有する北海道、その中心の旭川という絶好の場所に位置する我が医大、我がワンダーフォーゲル部の活動はとどまることを知りません。最後になりましたが、こんな部を温かく見守って下さる顧問の山内一也先生には大変感謝しております。

## 旅と鉄道研究会

医学科4年 神保 絢子

世の中色々な人がいますが、時折、理屈ぬきで、兎に角、鉄道やそのにおいのするものが好き、という人がいるようです。こういう人を、「鉄分が濃い」と形容することを御存知でしょうか。

今を去ること10年間、〇月×日。旭川市内の本屋、専門的鉄道書コーナーにて、後に鉄研顧問となる平義樹先生（解剖学第2教室）と初代会長となる田中新亮先生（当時学生）が偶然出会い、互いの趣味を知りました。この運命的な出会いがきっかけとなり、それまでは個々で活動していた「鉄分が濃い」学生達が引き寄せられ、翌年、旭川医科大学に「旅と鉄道研究会（略称、「鉄研」「旅鉄）」が発足となりました。

当時の活動は、部員各自の得意技能を生かし、頭と体力をフルに使った激しいものだったようで、数々の武勇伝が残され、現在の活動の基盤となっています。

鉄研の活動内容は、各地の路線・廃線跡を取材し、道中美味しい物を食べ、温泉につかり、お宝を收拾するというものです。今年はSLすずらん号に乗ってきました。

現在は、発足当時の先輩方はドクターとなられ、部員の半数は女子学生というように雰囲気も変わってきました。それでも、企画があると参加者の半数はOBというくらい、先輩方も活動に参加して下さり嬉しい限りです。

鉄道というのは、なかなか深い、味のある世界です。それを研究する会を、皆様、暖かく見守って下さい。踏み込みたい方は、是非一緒にどうぞ……。

## 研究室紹介

### 寄生虫学講座助手 迫 康 仁

寄生虫学講座は現在、伊藤亮教授、宮本健司助教、中尾稔助手、迫康仁助手、盛真智子事務官、伊藤園子実験助手の6名で運営されています。また、中谷和宏教務職員（動物実験施設）も研究活動に参加しています。本講座では内部寄生虫症（北海道で問題となっているエキノコックス症、発展途国にて問題であり、また新興・再興感染症として注目を浴びている有鉤囊虫症）およびダニ媒介性ボレリア菌によるライム病を研究テーマとしています。内部寄生虫症に関しては、条虫種間における抗原蛋白質が類似しているため種特異的な血清診断法が開発されていみませんでした。本講座にて種特異的な抗原蛋白質の簡便な精製法が確立され、それを用いた血清診断法は国際的にも評価を受けています。現在はすでにその抗原蛋白質の遺伝子クローニングに成功し、組換え蛋白質を用いた血清診断への応用を検討しているとともに、抗原蛋白質の性状解析を行っています。また、条虫類の系統進化や疫学研究という

観点から、条虫ミトコンドリアゲノムの解析も行っています。すでにミトコンドリアゲノムの全塩基配列を決定しており、これは扁形動物門において世界初の業績です。この成績より、扁形動物門のミトコンドリア遺伝暗号表が書き換えられる可能性が出てきます。ライム病に関しては、媒介ダニの疫学調査、分離菌の分子生物学的な比較解析、ボレリア菌の生物学的特性を中心に研究を行っています。本講座は海外研究者との共同研究も盛んな上、流行地域への技術提供を行うことにより積極的に国際交流を進めています。（写真：中国より来られた朴先生、タイより来られたパロン先生と）

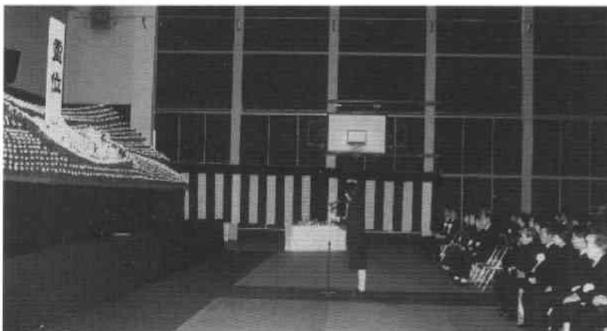


## 解剖体慰霊式

平成11年度解剖体慰霊式が9月22日（水）午後1時30分から本学体育館において執り行われました。

本年度の対象御遺体は、系統解剖29名、病理解剖51名、法医解剖85名で、慰霊式においては、諸霊の御霊に対しご冥福をお祈りするため黙とうが行われ、引き続き久保学長と学生代表（医学科第3学年松岡貴子）から追悼の辞が述べられました。

その後、御遺族と御来賓の方々及び教職員、学生の代表から献花が捧げられ、亡くなられた方々の御遺徳を偲びご冥福を祈念しました。（庶務課）



## 公開講座実施される

平成11年度本学公開講座が『老年医学の最前線』をテーマに10月6日（水）から11月1日（月）までの実6日間、市内ホテルにおいて開催されました。

本講座では、健やかな「からだ」と「こころ」で豊かな老年期を過ごしていただくために、本学の内科、精神科、整形外科及び脳神経外科の専任教官並びに医療法人社団旭川圭泉会病院の直江寿一郎病院長が専門分野の立場から老年医学の最新の知識をスライドを使いながら受講者に分かりやすく解説し、個々の健康管理に役立てて欲しいと願う熱気が伝わってきました。

今回のプランナーとして、種々ご協力をいただきました千葉教授をはじめ関係教職員に心から感謝申し上げます。（学生課）



# セクシュアル・ハラスメントの防止について

本学では、セクシュアル・ハラスメントは人権に関わる重要な問題と位置づけ、セクシュアル・ハラスメントの被害者の相談を受ける窓口（相談員）を設置するとともに、防止等に関する規程及びその関連する要項が9月8日開催の教授会で決定され、同日付けをもって施行されました。

また、「セクハラのないキャンパス・ライフ」と題して、セクシュアル・ハラスメントについての分かり易いパンフレットを作成し、学生諸君に配布したところであります。

セクシュアル・ハラスメントをなくすためには、何よりも相互の理解と信頼・人権の尊重が重要であり、学び易い環境づくりのために、全てが一貫となって考えていかなければならない重要な問題であることを是非理解していただきたいと願っております。

## 旭川医科大学におけるセクシュアル・ハラスメントの防止等に関する規程

（目的）

**第1条** この規程は、セクシュアル・ハラスメントの防止及び排除のための措置並びにセクシュアル・ハラスメントに起因する問題が生じた場合に適切に対応するための措置（以下「セクシュアル・ハラスメントの防止等」という。）に関し、必要な事項を定めることにより、旭川医科大学（以下「本学」という。）における人事行政の公正の確保、職員利益の保護及び職員の職務能率の発揮並びに学生等の修学環境の維持・向上を図ることを目的とする。

（定義）

**第2条** この規程において、次の各号に掲げる用語の意義は、当該各号に定めるところによる。

- (1) セクシュアル・ハラスメント 職員が他の職員、学生等及び関係者を不快にさせる性的な言動並びに学生等及び関係者が職員を不快にさせる性的な言動
- (2) セクシュアル・ハラスメントに起因する問題 セクシュアル・ハラスメントのため職員の就労上又は学生等の修学上の環境が害されること及びセクシュアル・ハラスメントへの対応に起因して職員が就労上の又は学生等が修学上の不利益を受けること。

（職員の責務）

**第3条** 職員は、この規程及び文部省大臣官房人事課長が定める指針（以下「指針」という。）に従い、セクシュアル・ハラスメントをしないように注意しなければならない。

（監督者の責務）

**第4条** 職員を監督する地位にある者（以下「監督者」という。）は、次の各号に掲げる事項に注意してセクシュアル・ハラスメントの防止及び排除に努めるとともに、セクシュアル・ハラスメントに起因する問題が生じた場合には迅速かつ適切に対処しなければならない。

- (1) 日常の執務を通じた指導等により、セクシュアル・ハラスメントに関し、職員の注意を喚起し、セクシュアル・ハラスメントに関する認識を深めさせること。
- (2) 職員の言動に十分な注意を払うことにより、セクシュアル・ハラスメント又はセクシュアル・ハラスメントに起因する問題が職場に生じることがないように配慮すること。

（学長の責務）

**第5条** 学長は、本学の職員及び学生等に対し、この規程の周知徹底を図らなければならない。

- 2 学長は、セクシュアル・ハラスメントの防止等のため、本学の職員及び学生等に対し、パンフレットの配布、ポスターの掲示、意識調査等により啓発活動を行うよう努めるものとする。
- 3 学長は、セクシュアル・ハラスメントの防止等を行うため、本学の職員及び学生等に対し必要な研修を

施するものとする。

- 4 学長は、新たに職員となった者に対してセクシュアル・ハラスメントに関する基本的な事項について理解させるため、及び新たに監督者となった職員に対してセクシュアル・ハラスメントの防止等に関しその求められる役割について理解させるため、研修を実施しなければならない。

（苦情相談への対応）

**第6条** 本学におけるセクシュアル・ハラスメントに関する苦情の申出及び相談（以下「苦情相談」という。）に対応するため、総括相談員及び相談員（以下「総括相談員等」という。）を置く。

- 2 総括相談員は、教育研究及び厚生補導担当の副学長をもって充て、職員及び関係者に係る相談員は総務部庶務課長並びに医療担当の副学長並びに看護部の部長及び副部長をもって充て、学生等に係る相談員については、別に定める。

- 3 苦情相談に当たっては、複数の相談員が対応するものとし、苦情相談を行う者と同性の相談員が同席するよう努めるものとする。なお、同性の相談員が同席できない場合は、相談員が指名した職員が同席することができるものとする。

（相談員等の責務）

**第7条** 総括相談員等及び相談員が指名した職員（以下「相談員等」という。）は、苦情相談に係る問題の事実関係の確認及び当該苦情相談に係る当事者に対する指導・助言等により当該問題を適切かつ迅速に解決するよう努めなければならない。この場合において、相談員等は指針に十分留意しなければならない。

- 2 相談員等は、苦情相談への対応に当たっては、関係者のプライバシーや名誉その他の人権を尊重するとともに、知り得た秘密を他に漏らしてはならない。

（人事院への苦情相談）

**第8条** 職員は、人事院に対して苦情相談を行うことができる。

（不利益取扱いの禁止）

**第9条** セクシュアル・ハラスメントに関する苦情の申出、調査への協力その他正当な対応をした職員、学生、関係者等に対して不利益な取扱いをしてはならない。

（雑則）

**第10条** この規程に定めるもののほか、セクシュアル・ハラスメントの防止等について必要な事項は、学長が別に定める。

附 則

この規程は、平成11年9月8日から施行する。

## 旭川医科大学における学生等のセクシュアル・ハラスメントの相談への対応に関する要項

（平成11年9月8日教授会決定）

（趣旨）

**第1条** この要項は、旭川医科大学におけるセクシュアル・

ハラスメントの防止等に関する規程第6条第2項の規定に基づき、学生等のセクシュアル・ハラスメントの相談への対応に関し必要な事項を定める。

**(苦情相談への対応)**

- 第2 学生等からのセクシュアル・ハラスメントに関する苦情の申出及び相談（以下「苦情相談」という。）に対応するため、次のとおり相談員を置くものとする。
- 2 セクシュアル・ハラスメントに関する相談窓口として、複数の相談員を置く。
  - 3 セクシュアル・ハラスメントに関する苦情相談を申出する者は、自由に相談窓口を選択することができるものとする。
  - 4 学生等から苦情相談の申出があった場合は、相談員は速やかに対応しなければならない。
  - 5 苦情相談には原則として、複数の相談員で対応するとともに、苦情相談を申出する者と同性の相談員が同席するよう努めなければならない。ただし、同席する相談員については、苦情相談を申出する者の意思を十分に尊重しなければならない。
  - 6 相談員は、次に掲げる者をもって充てる。
    - (1) 本学の教官のうち学長が指名する者
    - (2) 保健管理センター専任教官（カウンセラー）及び保健婦

**(相談員会議)**

第3 相談員は、相談員相互の連携を図るとともに、苦情相談に適切に対応するため、必要に応じ相談員会議を開催することができる。

**(調査委員会)**

第4 学長は、必要に応じセクシュアル・ハラスメント調査委員会（以下「委員会」という。）を設置するものとする。

- (1) 委員会について、必要な事項は、別に定める。

**(庶務)**

第5 学生等の苦情相談への対応に関する庶務は、教務部学生課が行うものとする。

**(その他)**

第6 この要項に定めるもののほか、学生等のセクシュアル・ハラスメントの防止等に関し必要な事項は、学長が別に定める。

**附 則**

この要項は、平成11年9月8日から実施する。

**セクハラのないキャンパス・ライフ**

**★セクシュアル・ハラスメントの定義**

- ・相手の意に反する性的な言動（性的な関心や欲求に基づく言動をいい、性別により役割を分担すべきとする意識に基づく不快な言動を含む。）を行い、その言動に対する相手の対応によって、自己の影響力行使し、修学・就労・教育・研究等において、一定の利益又は不利益を与えること、若しくは与えようとする事。
- ・相手の意に反する性的な言動により、修学・就労・教育・研究等の環境を損なうこと。

職員又は上級生などが、自分の優位な立場を利用して、逆らいにくい立場にある者にその者が望まない性的な言動を繰り返したり、その目的で修学上の不利益を与えるようなことは、明らかにセクシュアル・ハラスメントである。

**★セクシュアル・ハラスメントになり得る性的な言動**

**◎行動によるセクシュアル・ハラスメント**

- ・ヌードポスター等をキャンパス内に貼る。



- ・卑猥な写真・雑誌・記事等をキャンパス内で相手に見せたり、見るよう強要する。
- ・身体を執拗に眺め回す。
- ・執拗に食事やデートに誘う。
- ・性的な内容の電話をかける、手紙・Eメールを送る。
- ・身体に不必要に接触する。
- ・トイレや更衣室等をのぞき見する。
- ・性的な関係を強要する。
- ・宴会やコンパ等でお酌や隣に座ることを強要する。
- ・カラオケでのデュエットを強要する。
- ・卑猥な隠し芸を無理やり強要する。

**◎発言によるセクシュアル・ハラスメント**

- ・スリーサイズを聞くなど身体的特徴を話題にする。
- ・聞くに耐えない卑猥な冗談を交わす。
- ・体調が悪そうな女性に「今日は生理か」、「もう更年期か」などという。
- ・性的な経験・性生活について質問する。
- ・性的な噂をたてたり、性的なからかいの対象にする。
- ・「男の子、女の子」、「僕、坊や、お嬢さん」や「おじさん、おばさん」などの人格を認めないような呼び方をする。
- ・「男のくせに、女のくせに」などと発言する。

**★セクシュアル・ハラスメントを行わないために**

1. 相互の人格を尊重し合うこと。
2. 相互が大切なパートナーであるという意識を持つこと。
3. 相互を性的な関心の対象としてのみ見る意識をなくすこと。
4. 異性を劣った性として見る意識をなくすこと。
5. 性的言動についての受け止め方は個人間で差があり、相手が不快に思っていないかどうか配慮すること。
6. 相手が上下関係や人間関係に配慮して不快であることの意味表示をしない場合もあることを認識すること。
7. 相手が拒否したり、嫌がっていることが分かった場合は、言動を繰り返さないこと。

**★セクシュアル・ハラスメントを受けたり、見たりしたら？**

一人で我慢しないで、下記の相談員に気軽に相談下さい。

**セクシュアル・ハラスメント相談員**

- 坂本 尚志（生理学第二講座教授） ☎68-2330(内線2330)
- 高後 裕（内科学第三講座教授） ☎68-2462(内線2460)
- 上口勇次郎（生物学教授） ☎68-2729(内線2729)
- 良村 貞子（基礎看護学講座教授） ☎68-2914(内線2914)
- 岡田 洋子（臨床看護学講座教授） ☎68-2931(内線2931)
- 北村久美子（地域保健看護学講座教授） ☎68-2953(内線2953)
- 武井 明（保健管理センター講師） ☎68-2767(内線2767)
- 玉川 憲子（保健管理センター保健婦） ☎68-2768(内線2768)

## 大学構内の違法駐車禁止について

学内における車の進入経路、学生・教職員の駐車許可台数、駐車場所の指定等一連の学内交通規制に関する事項は、学生の意見を含め大学が丸となって検討し今日に至っております。

特に、車の進入経路・駐車禁止区域の設定については、スムーズな車の運行と歩行者の安全確保及び万が一における緊急車両の進入を考慮し決められたものであります。

また、降雪期にあっては違法駐車は除雪の大きな妨げになりますので、違法駐車は絶対しないよう常識ある行動を切に望みます。(学生課)

## 教官の異動

転出	11.10.1	病理学第一	助教授	李 康弘
辞職	11.10.15	耳鼻咽喉科学	助教授	高橋 光明
昇任	11.12.1	心理学	教授	高橋 雅治
昇任	11.12.1	耳鼻咽喉科学	助教授	野中 聡

## 平成12年度入学試験実施に伴う大学構内の立入禁止等について

平成12年度大学入試センター試験及び本学入学者選抜第2次試験実施に伴い次の期間講義実習棟、福利厚生施設棟及び体育館が立入禁止になります。

### 入試センター試験

平成12年1月14日(金)～1月17日(月)正午  
※1月17日(月)午前は医学科第1から  
3学年及び看護学科学生は休講です。

### 第2次試験

#### 【前期日程】

平成12年2月24日(木)～2月28日(月)正午

#### 【後期日程】

平成12年3月10日(金)～3月13日(月)正午

(学生課)



## 外 務

生理学第二講座  
助教授 高草木 薫

### グローバルスタンダード

グローバルスタンダード(Global standard)と言う言葉を最近良く耳にします。世界規準とか世界標準という訳語がついているようです。日本の大学のあり方や、研究・教育の隅々までそのうちにこの言葉が浸透して行く様な気がします。国立大学の独立法人化がほぼ決定しました。日本が「自ら作った国立大学の現状にNo」という答えを出した」ということの様です。科学新聞(平成11年8月20日)によると、文部省の有職者懇談会で『法人化拒否大学は予算縮減、受け入れ大学には恩恵』という記事が載っています。この内容はともかく、何故、日本が国立大学の改革を必要としているのかを熟慮する必要があると思う。その理由として、『研究の国際競争力の向上、研究成果の社会・産業への寄与』が挙げられている様です(「今後の国立大学等の在り方に関する懇談会の概要」より)。

国際競争力という観点から、私の経験した米国について触れてみます。米国の殆どが州立大学と私立大学です。州立大学も、州が建物を提供するだけであり、教官全体の研究費や生活費、建物の維持費、人件費等は殆どが研究者へのグラント(広義の研究費)で支給されます。従って、高額なグラントを持つ研究者を各大学は獲得しようと試みる。また教育専任教官は、学生による講義の評価により給料が左右されるため、常に良い講義を心掛けていました。一方、グラントを確保できなくなり研究室を迫られた教授や、主任教授を

解任された教授もいました(主任教授は、その講座の助手以上のスタッフの選挙で決定される)。しかし、競争原理の中から素晴らしい先進的研究が生まれました。その研究には豊富な資金援助がされ、国内外から優秀な研究者やポスドク、大学院生が集まってきた。結局、競争原理の長所と短所を見てきた訳ですが、米国のボスの話では、競争社会を勝ち抜いた優秀な研究者や臨床医になって始めて良い教育を施すことができるということです。教官の知名度の高さが、学生の講義を聞く態度に反映され、かつ、学生はその教官から学んだことを誇りに感じると言うのです。米国でも医学部に入学する学生の知的レベルは日本同様に高い。その学生の優秀さを引き出せないのは学生の努力不足と言うよりも教官の力不足であると認識すべきことでした。

文部省はある意味でグローバルスタンダードの言葉を借りて国立大学の独立法人化を主張していますが、「大学の教官として高い給料を支払っているのだから、生産性のある成果を出しなさい」と言いたいのが本音では無いでしょうか。「生産性のある成果」とは「競争力のある研究や、社会・産業に還元できる研究・教育の普及」とも言えます。しかし、「学術や基礎研究はそれ自体で文化としての要因を持つという考え方」も重視しなければなりません。これらの観点を熟慮した上で大学を改革するには、組織一人一人の意識改革が最優先されるべきでしょう。これはシステムやカリキュラムの変更を必要としません。まづ我々がこれらの観点を認識し優れた研究者や優れた臨床家になること(orであること)が、良き医学教育の基礎となることを理解しなければなりません。グローバルスタンダードを意識して大学の改革を遂行することは、私達の責任であると同時に、「将来、本学の学生が世界規準で物事を考え、世界中で活躍する」為に必要なステップです。(生理学第二講座 助教授)